

# 能のすすめ



## ☆はじめに

駅に大きなポスターがありました。お寺の伽藍で能が舞われている写真です。そこには次のようなキャッチコピーが記されておりました。

スーパースター世阿弥(ぜあみ) 十二歳  
プロデューサー義満(よしみつ) 十八歳  
能は六百年前からライブです

世阿弥は最高の俳優であり音楽家であり、劇作家であり、作曲家であり、理論家であり、一座の統率者あり、まさにスーパースター、マルチ人間でした。美少年盛りの世阿弥が、父親阿弥(かんあみ)と共に初めて京都に進出した、その舞台を当時の青年将軍・足利義満が見たのです。すばらしい出会いでした。それから六百有余年、時代を超え、国境を越えて能は人の心を打ち続けている、なんと長い命でしょう。世界にこんな例はありません。

イギリスでシェイクスピアが生まれたのは世阿弥のちょうど二百年も後のことでした。このポスターはこう締めくくられます。

## そうだ京都 行こう JR東海

(一九九七年)

能には現代を魅了するすばらしさがあります。もともと古くて、実はもとも新しい芸術です。能を観る。狂言を楽しむ。若い感性は、そこに驚くほどの命の輝きを見出すことでしょう。能はヨーロッパ的な文化とは、逆の方向に発達を遂げました。「無」の部分に多くの表現を賭けた音楽の発想。西欧の音楽家を驚かせたその前衛生。情感を凝縮した能面と、能面に導かれた演技の、抽象的な美と力の世界。贅を極めた装束。奥深い「こころ」の演技。人間存在の根源を象徴する宝石のような演劇、それが能です。

## ☆歴史 能の歩んだ道

日本は「古事記」「日本書紀」の神々と英雄の叙事詩を出発点に、「万葉集」で叙情詩を、そして世界に先駆けて小説「源氏物語」を完成させます。しかし演劇が確立するには、中世まで時間を経ねばなりませんでした。

観阿弥・世阿弥という天才父子によって生まれた「能」という演劇は、現代まで七世紀近く演じ継がれているのです。

室町の将軍たちのすぐれた美意識もそれを支えました。そして信長も秀吉も家康も能の大ファンでした。

江戸の幕府によって能は国家指定芸能となり、演技の密度をますます高めました。

明治維新によって幕府に守られる安定した身分を失いますが、能は歌舞伎のような商業資本の後ろ盾もなく、自力で復興します。そして世界中の価値観が変貌した第二次大戦後から現代まで、それこそ能の歴史の中でもまれにみる活況を呈しているのです。

海外での公演も盛んに行われています。ギリシヤの壮大な石の野外劇場や、メトロポリタン美術館のエジプト神殿前の演能ほか、世界は能を芸術の未来を見せる演劇として、高く評価しているのです。

二十世観世宗家 観世清和



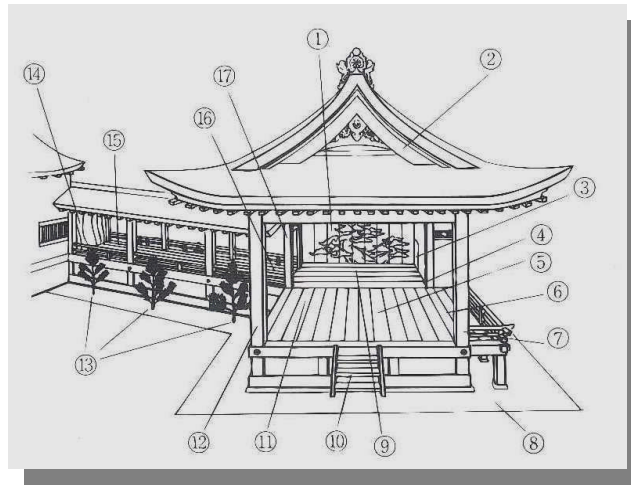
## ☆能の舞台：小さな宇宙

能舞台はひとつの哲学を持っています。「無」の空間にさまざまなドラマが生まれ、それがまた「無」に戻って鎮まるということです。これは「禪」の精神と共通するものではないでしょうか。

能楽堂という能と狂言の専門劇場が生まれるのは明治からのことです。それまでの能舞台は野外または屋外に独立して建てられていました。現在最古の能舞台は、国宝になっている京都・西本願寺のもですが、信長時代の建造物です。

皆さんが能楽堂に入られると、屋根の下にまた屋根のある能舞台があることに驚かれるかも知れませんが、屋外のデザインを留めているのです。大きな老松の絵も能が野外で上演されていた名残でもあります。





- ①【鏡板（かがみいた）】老松が描かれている。
- ②【屋根】屋外に能楽堂があった昔の名残を留めたもの。
- ③【切戸口（きりどぐち）】引戸のついた低い出入口。地謡や後見が入り出すところ。
- ④ 笛柱の下に鐘をつるす綱を通す環がある。また天井には鐘を吊り下げる滑車がつけられ、（道成寺）の鐘のみ使われる。
- ⑤ 約6メートル四方の舞台には檜が縦に張られている。
- ⑥【地謡座（じうたいざ）】地謡方が座る位置。
- ⑦【ワキ柱】ワキ方が常にこの柱の側に座るのでこの名がある。
- ⑧【白州】能舞台が屋外にあった時の名残。玉石が敷かれている。
- ⑨【後座（あとざ）】檜が横に張られている。向って右から笛、小鼓、大鼓、太鼓が座り、左後方に後見方が座る。

- ⑩【階（きざし）】舞台の開始を寺社奉行が命じる時などに使用した頃の名残。
- ⑪【常座（じょうざ）】舞台に入ってきたシテ（主役）などがまず足をとめ、所作の基点となる。
- ⑫【目付柱（めつけはしら）】能面をつけ極度に視野が狭められた演者の目標となる柱。
- ⑬【松】舞台の方から「一の松」、「二の松」、「三の松」の順に高さを低くして遠近感を出している。
- ⑭【揚幕（あげまく）】演者の出入りに際し、二人の後見が竹竿を上げ下げする。
- ⑮【橋掛り】演者が出入りする通路であると同時に舞台の延長として使われる重要な演技の空間でもある。
- ⑯【狂言座】間（アイ）狂言が控えている所。
- ⑰【シテ柱】シテが立つ常座の近くにあるため、この名称がある。

☆能を演ずる人びと

能は「分業制度」によって成り立っています。そしてすべて「専業」であります。

シテ方と呼ばれる人びとは、まず能の中心です。能面をつける（かける）特権を持ち、神にも鬼にも、女性にも老人にも亡霊にも、あらゆる役を演じます。合唱団である地謡もシテ方から出ます。作り物と呼ばれる舞台装置の製作もその仕事です。鏡板を背に正座している後見は、シテ方に事故の生じた時にはその能を舞い継ぐ責任を持ち、舞台監督でもあります。

ワキ方と呼ばれる職能は、室町時代の末頃に独立したとされています。現実の男性の役だけに扮する専門職。シテが言わば夢幻の、詩の中の人物であるとすれば、ワキは現実を代表するわけで、観客の代表者として古典の夢を見る存在でもあります。



☆能の音楽：極限のエイトビート

能は歴史上の人物や「源氏物語」、「平家物語」など古典の人物が、ミュージカル様式の詩劇を展開することに対して、狂言はその他大勢の中のひとりを生きた人物が、人生喜劇の一コマを、セリフを主として演じます。能は、笑いの世界をすべて狂言にまかせることによって、ラジカルな演劇世界を構築できたのかもしれない。

狂言方は、「狂言」という演劇、たとえば「棒縛（ぼうしばり）」、「釣狐（つりぎつね）」などの独立した笑いの世界を演ずるとともに、能の中の一役としても参加します（間狂言・アイ狂言）。これはナレーターとしての役も多いのですが、あるいは能のドラマの重要な進行を分担する場合もあるのです。

器楽演奏者は、囃子方（はやしかた）と呼ばれます。それぞれに専業で、笛方は笛の修行に一生を賭けるのです。

囃子方は決して伴奏者ではありません。それぞれが主役であるシテと対等に渡り合う、大事な役です。

能の音楽は八つのリズムに支配されています。ジャズやロックなどとの対比も面白いでしょう。第一、四分の三が打楽器なので……唯一の管楽器である笛も、メロディーではなく、実はリズムを吹いているのです。

能の音楽が極めたのは、リズムの複雑さと、気迫の強さの表現でした。昭和三十年代、パリで初めて能が演じられた時、一番衝撃を受けたのはあちらの前衛音楽家たちだったといえます。「ヤラレタ」と叫んだというのは有名な話です。指揮者に統率されずに、自分たちのリズム感のぶつかりあい、五線譜に束縛されない、いわば「偶然の中に必然を探る」新しい音楽を目指そうとしていたから、能は七世紀近く前から、すでにそれを実践していたのですから。

横たえて気迫そのものを吹く笛と、下から打ち上げる凜然（りんぜん）とした小鼓と、水平に打つ大鼓の衝撃音（なんと、皮を炭火で何時間も乾燥させるのです）と、上から打ち下ろす太鼓の強さと華やかさと・・・。

また打楽器の演奏者が掛け声をかけるのは、コンピュータ的信号をお互いに発し合っているのです。

太鼓と笛が発する、人間の耳に聞こえる音の五倍ものハイパー音響が、人間の脳に素晴らしいアルファー波を生じることを、現代科学が証明しました。世界に類例を求めれば、バリ島のガムラン。青銅の楽器が同じく百キロヘルツの音を出しているのです。



笛



こつこみ小鼓



おつこみ大鼓



たいこ太鼓



☆能の演技・・・その幾何学的美学

日本舞踊の繊細かつ複雑な指先の表現に比べるまでもなく、能はほとんど手を使わない演劇です。それは常に直線か大きな円運動にとどまるのです。涙を押さえるとか、相手を刀で切るとか、お酌をするとかの具象的表現もないわけではありませんが、多くは抽象的な幾何学的演技です。もともと豊富な感情表現の顔を能面で覆い、次に伝達能力を持つ指と手の動きを極限まで減らす。それに対し、足の演技はなによりも重要です。舞台をすべる白い足袋の美しさ。「運び」と呼びますが、すり足による体全体が描く舞台の軌跡で、能は大きなテーマを表現しようとするのです。バレエなど、いかに大地から離れて跳ぼうとする舞踊に対し、能はいかに地に密着し得るかを証明しようとしているかのようです。

能の音楽が、大事な部分になるほど音の少ない部分に重い表現を託すように、能の演技も大事な動きになればなるほど不動の存在感に賭ける。それはちょうど最高回転の独楽（コマ）が静止して見えるように、最大の体力と気力が集中されていなければなりません。その時の能役者の心臓は、どんなマラソン選手も及ばぬ激しい心拍数を刻んでいるのです。

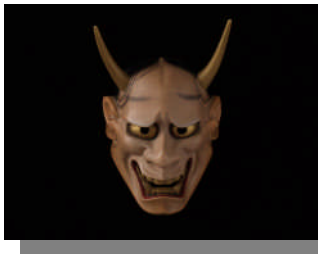
☆能面・・・能の命そのもの

能が創作された時代に、すぐれた能面作家が大勢生まれたのはなんという幸せか・・・。観阿弥・世阿弥の汗の染みた能面が、それも大部分が観世家に、ただ保存、伝承されているだけではなく、今も舞台上生きて用いられているということは、素晴らしいことです。

能面はいわゆる「仮面」ではありません。能面こそが真実の顔であり、素顔の役は世阿弥の時代から直面（ひためん）と呼ばれました。つまり自分の顔を能面として使えということなのです。

「能面のような」という無表情の代名詞に使われる場合もありますが、無表情なのではありません。あらゆる表情を内蔵し、演技者の技によってそれこそ無限の表情を舞台に生み出すのです。能の演技者は、能面の中に自分のすべてを封じ込めるのです。装束を着け終えたシテは、鏡の間（橋掛り奥、揚幕の内側）で能面をおし頂いてかけ、気力を凝らして出を待つのです。

「オメン」とも「オメンヲカブル」とも言いません。能面または「オモテ」。つまり能面こそがすべてのオモテなのです。「オモテをかける」と言います。



☆最後に・・・

二〇〇一年ユネスコは世界の無形文化遺産、つまり人間によって伝承される芸能の類を、世界中からまず十九種類選定しました。

日本を代表したのは能楽（能と狂言）でした。能や狂言は文化財だから尊いものではありません。時代を越え、国境を越えて人々に感動を与え続けてきたことが素晴らしいのです。

観世宗家（家元）・観世清和氏は観阿弥から数えて二十六代目になります。そして二十七代目を継ぐ三郎太君は現在小学校6年生です。能が大好きだそうです。



（平成二十三年初会「翁」千歳）

世阿弥が言っています。

「家、家にあらず、継ぐを以て家とす。人、人にあらず、知るを以て人とす」

これは「家はただ続くから家なのではない。継ぐべきものがあるから家なのだ。人もそこに生まれただけではその人とは言えない。その家を守るべきものを知る人だけが、その家の人と言えるのだ。」ということなのです。

三郎太君は仕舞や能の子方（こかた）を数多く演じています。

歌舞伎では子役と言いますが、能の世界では子方です。この三郎太君へ、家及び芸の継承がいま行われているのです。

☆財団法人 観世文庫 賛助会員募集

財団法人観世文庫では、観阿弥・世阿弥父子の時代から現在の観世宗家に伝わる様々な能楽関連の資料、それは世阿弥の遺した文献や能面、また世阿弥以降の代々の観世大夫の遺したものです。これら文化的価値のあるものを後世に伝えるべく維持管理をしております。またこれらの様々な文献の調査も研究者、専門家の手により現在も行われております。

更には能楽の魅力を楽しんでいただくために「能楽観世座」公演を、若手能楽師の育成、後継者の養成を目的とした「観世座MIRAI」など様々な公演活動も実施しております。

その他、各地で子供たちを対象に能楽体験スクールも開催し、能楽普及に務めておりますが、これらの活動はすべて観世文庫にご協力いただいております。賛助会員の皆様のお力添えの賜物と深く感謝申し上げます。

今後も様々な活動を実施するためには、更に多くの皆様のご協力が必要です。

財団法人観世文庫の活動をご理解いただき、出来るだけ多くの方々に、更なるご協力を賜りますようお願い申し上げます。

【賛助会員募集要項】

●入会方法

財団法人観世文庫事務局にご連絡頂きましたら、入会のご案内、郵便振替用紙をお送り申し上げます。

ご入金確認後、会員証をお送り申し上げます。

●会員特典

会員証の発行（毎年度発行）  
各種公演・講座・講演会等のご優待。  
（優先予約と入場料割引）

●会費

一口一万円（法人・団体・個人）  
\*一口以上でお申込いただきますようお願い申し上げます。

\*年度途中ご入金の場合も、その年度終了までの会費とさせていただきます。  
（事業年度は毎年四月一日～翌年三月末日）

以上、ご協力をお願い申し上げます。

財団法人 観世文庫

〒150-0001

東京都渋谷区神宮前6丁目24番4号

電話番号 03-6418-5025

FAX 03-6418-5026

E-mail / [kanzebunko@kanze.net](mailto:kanzebunko@kanze.net)

URL / <http://www.kanze.net>